

## 参考文献

- 1) 厚生労働省大臣官房統計情報部：社会医療診療行為別調査，2005
- 2) 厚生労働省大臣官房統計情報部：賃金構造基本統計調査，2005
- 3) 国土交通省大臣官房技術調査課：土木請負工事工事費積算基準，2005
- 4) 国土交通省大臣官房官庁営繕部：公共建築工事共通費積算基準，2003
- 5) 財務省財務総合政策研究所調査統計部：法人企業統計調査，2001-2005
- 6) 国土交通省総合政策局建設振興課：建設業構造基本調査，2005
- 7) 中央労働災害防止協会：安全対策の費用対効果－企業の安全対策費の現状とその効果の分析－，2000
- 8) 栗山浩一：公共事業と環境の価値，1997

## Ⅱ－２．社会レベルから見た社会的損失に関する現状分析

分担研究者 嘉納成男 早稲田大学

### 2.1 現場作業者アンケート調査

#### 2.1.1 調査目的

本研究では、現場作業者の意識をアンケート調査し、現場労働の現状や労働災害の発生が、優秀な人材の確保を難しくするとともに、工事現場におけるモラルが低下する原因となることを明らかにする。

アンケート調査内容は、以下の項目について実施した。

- ①就業特性
- ②労働環境
- ③労働災害防止活動の実施状況

#### 2.1.2 調査期間

2006年8月下旬～11月上旬

#### 2.1.3 調査方法

本調査では「建設産業における安全と就業に関するアンケート」と題し、建設現場の元請工事業者の所長、もしくは副所長にアンケート調査票の配布を依頼、現場作業者を対象にアンケート調査を行った。アンケート調査は主要建設会社5社より紹介された計10現場（各2現場）で行い、約2週間をめどに回収した。（表1・1）

回収については、後日訪問、もしくは郵送していただき実施した。2006年11月上旬までに322部（回収率100%）が回収され、本調査ではこのサンプルについての分析を行った。

表 1-1 アンケート用紙の配布と回収

企業名	現場名称	配布日	回収日	配布部数	回収部数
A社	A-1工事	8月24日	9月11日	30部	30部
A社	A-2工事	8月29日	9月6日	30部	30部
B社	B-1工事	8月25日	9月1日	50部	50部
B社	B-2工事	9月1日	9月11日	30部	30部
C社	C-1工事	8月28日	9月4日	31部	31部
C社	C-2工事	9月6日	9月25日	31部	31部
D社	D-1工事	9月5日	9月20日	30部	30部
D社	D-2工事	9月20日	9月21日	30部	30部
E社	E-1工事	9月20日	9月21日	30部	30部
E社	E-2工事	9月25日	11月1日	30部	30部

#### 2.1.4 調査項目

質問は以下の4点について行った。

##### 1) プロフィール (5項目)

- ① 年齢
- ② 性別
- ③ 現在の職種 (主要なもの1つ)
- ④ 現在の職種に就く前の仕事の有無  
「ある」場合はその内容 (複数回答可)
- ⑤ 建設業にたずさわっている年数

##### 2) 就業特性 (22項目)

- ① 現在の職種に就く時重要であったこと (19項目)  
・「1.非常に重要である」～「5.全く重要でない」と「6.わからない」の6つの選択肢から選択。
- ② 現在の職業に就く時のきっかけ (複数回答可)
- ③ 現在の職業について続けていくか  
「一時的なものである」場合はその内容 (複数回答可)
- ④ 建設業への就業の推薦度

##### 3) 労働環境 (20項目)

- ① 実際に働いた建設現場の印象 (19項目)  
・「1.非常にあてはまる」～「5.全くあてはまらない」と「6.わからない」の6つの選択肢から選択。
- ② 実際に働いた建設現場の印象と働く前の印象との変化

##### 4) 労働災害防止活動 (20項目)

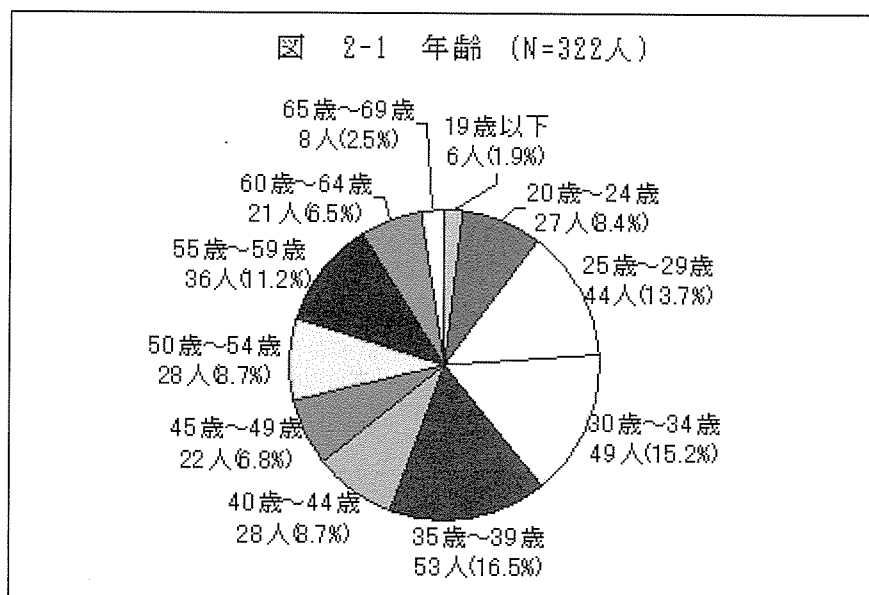
- ① 労働災害防止活動等 (16項目)  
・「1.非常にあてはまる」～「5.全くあてはまらない」と「6.わからない」の6つの選択肢から選択。
- ② 他のものづくりの現場と比べたときの労働災害等 (4項目)  
・「1.非常に多いと思う」～「5.非常に少ないと思う」と「6.わからない」の6つの選択肢から選択

## 2.2 アンケートの集計結果

### 2.2.1 プロフィール

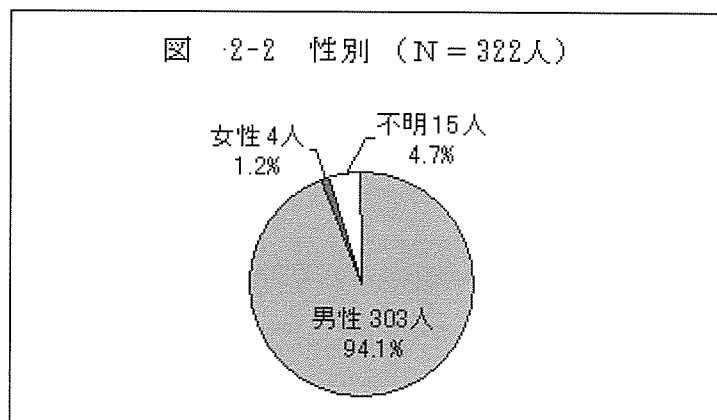
#### 1) 年齢

アンケート対象の年齢は 35～39 歳が最も多く 53 人 (16.5%)、続いて 30～34 歳 49 人 (15.2%)、25～29 歳 44 人 (13.7%) となっており、若い作業者ののが比較的多い。(図 2-1) 又、50 歳以上のベテランスタッフは 93 人 (28.9%) となっている。



#### 2) 性別

性別は、男性が 303 人と全体の 94.1% を占めており、ほとんどが男性作業員となっていた。(図 2-2) これに対して女性作業員は 4 人 (1.2%) であった。

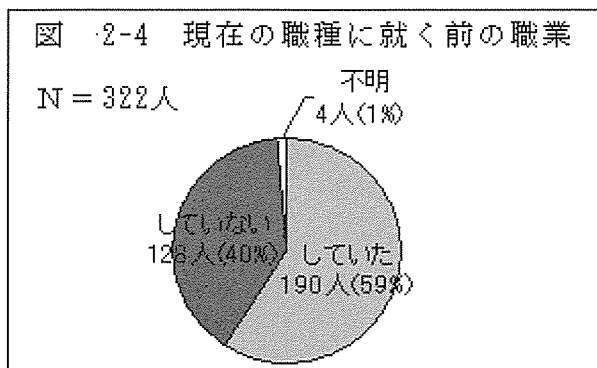
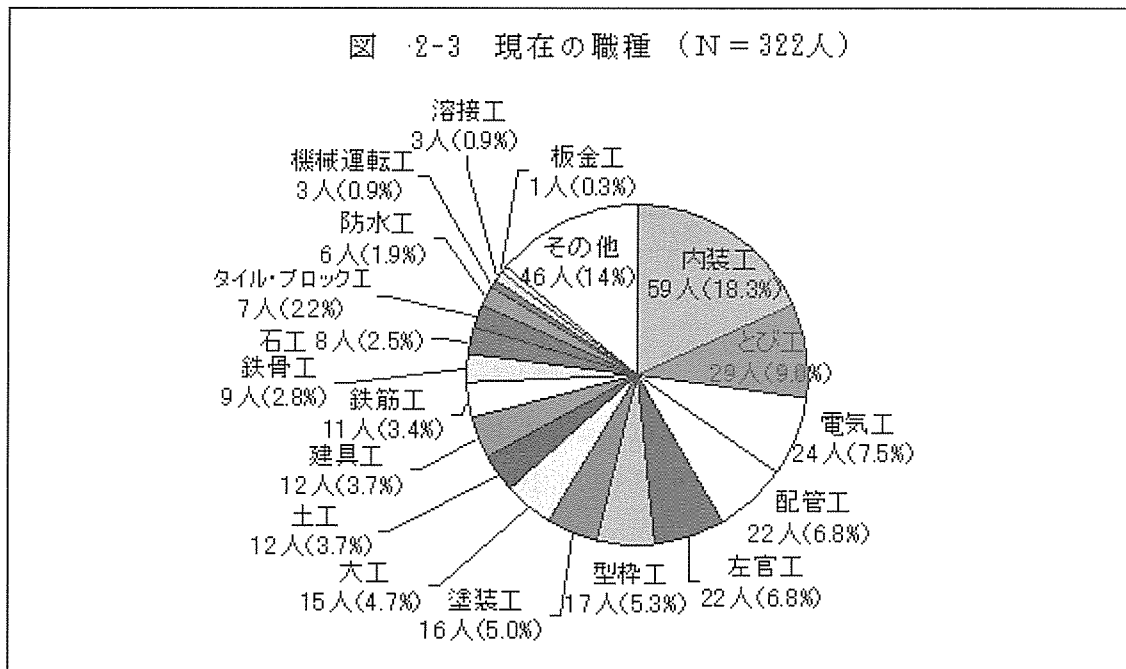


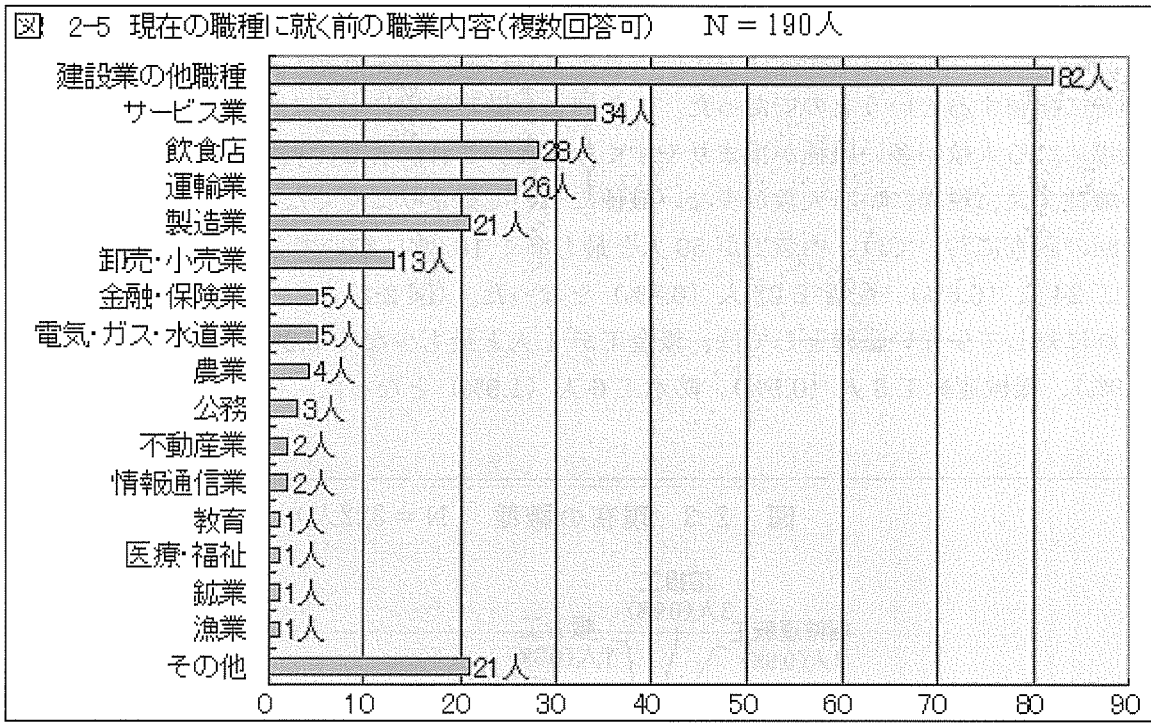
### 3) 現在の職種

今回アンケート調査票の配布方法は所長もしくは副所長に依頼し、そのとき現場にいる作業者に配布するというものであった。これにより随時現場にいることが多い職種、もしくは現場にいる人数が多い職種が集まりやすくなった。これに対して現場にいる期間が非常に短い職種、又、現場にいる人数が少ない職種について集まりにくくなった。

今回の調査においては、内装工が 59 人と最も多く 18.3%、続いてとび工 29 人 (9.0%)、電気工 24 人 (6.8%)、配管工 22 人 (6.8%) となった。(図 2-3)

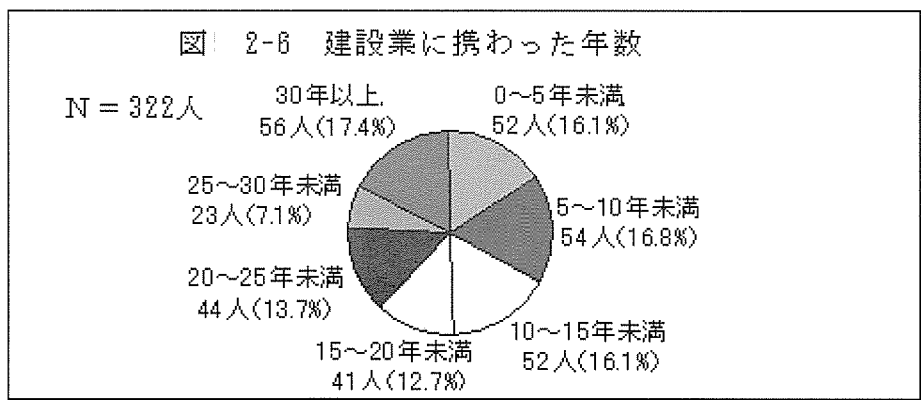
これに対して少ない職種としては、板金工が 1 人と最も少なく 0.3%、続いて溶接工 3 人 (0.9%)、機械運転工 3 人 (0.9%)、防水工 6 人 (1.9%)、機軸運転工 3 人 (0.9%)、防水工 6 人 (1.9%) となった。





5) 建設業にたずさわっている年数

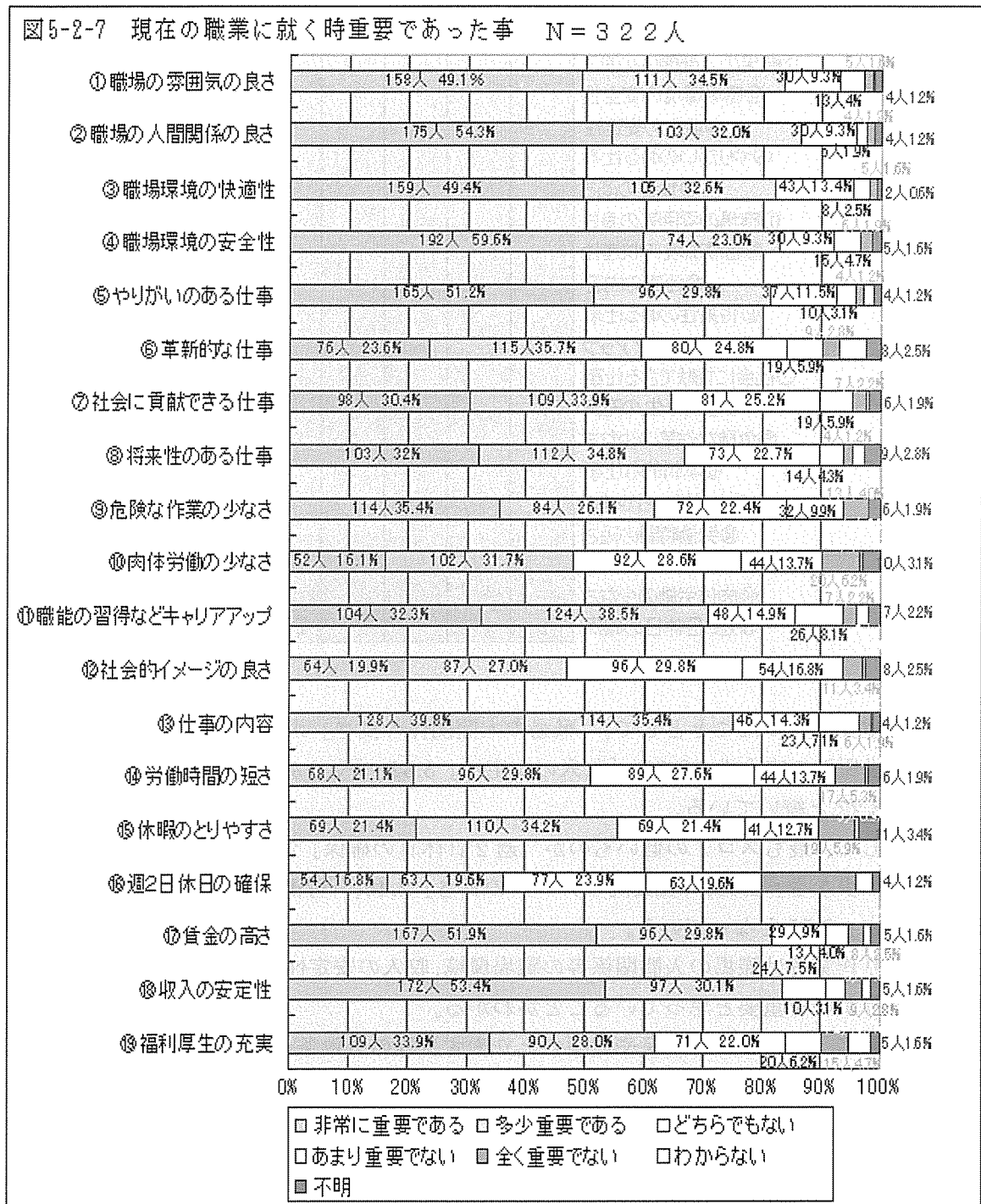
建設業に携わった年数としては、30年以上が最も多く56人(17.4%)、続いて5~10年未満54人(16.8%)、0~5年未満52人(16.1%)、10~15年未満52人(16.1%)となった。



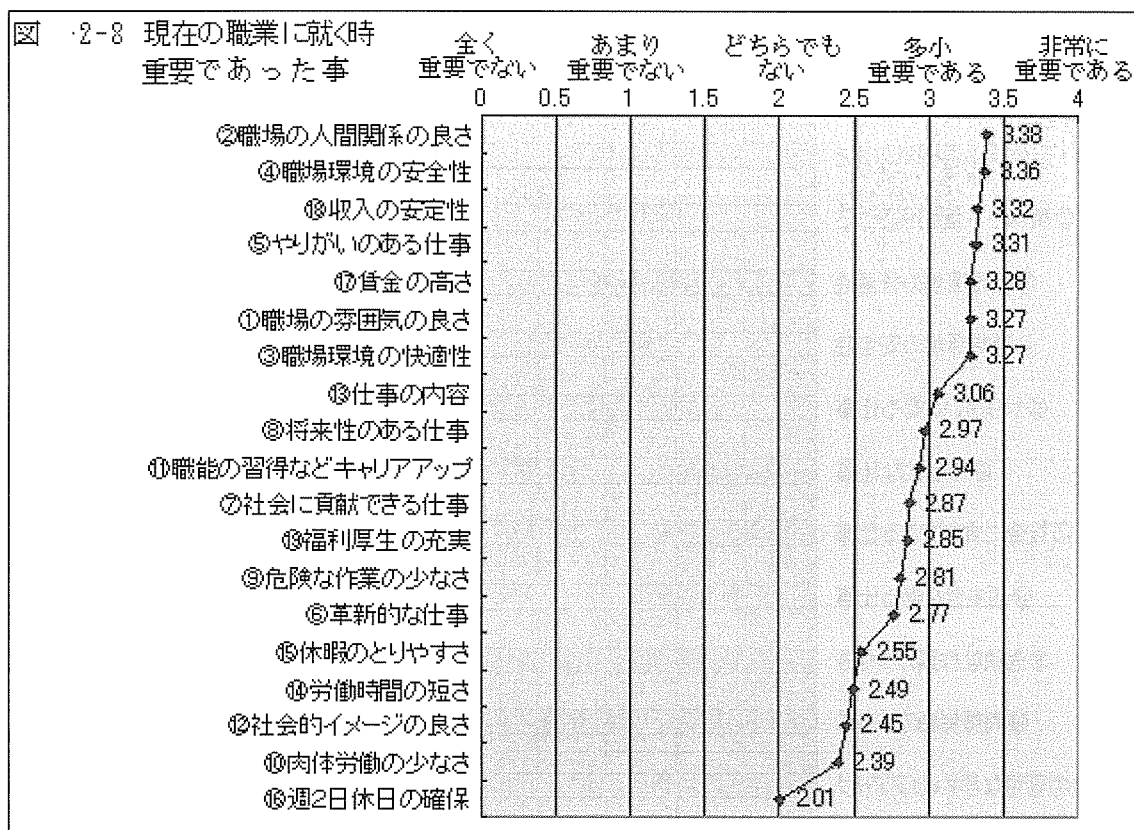
## 2.2.2 就業特性

### 1) 現在の職種に就く時重要であったこと

「あなたが現在の職業に就かれる時に重要と考えた事はなんですか」とう質問をしたところ図2-7のような度数分布になった。



このとき、「わからない」、「不明」を除き、「非常に重要である」= 4、「多少重要である」= 3、「どちらでもない」= 2、「あまり重要でない」= 1、「全く重要でない」= 0、とスコアを付けその平均点を算出し、上から平均点の大きい順に並べ替えると図 2-8 のようになる。



就業時に重要であったこととして、「職場の人間関係の良さ」が最もスコアが高く 3.38、続いて「職場環境の安全性」3.36、「収入の安定性」3.32、「やりがいのある仕事」3.31、「賃金の高さ」3.27と続いている。

これに対して、最もスコアの低いものが「週2日休日の確保」2.01となっており、続いて「肉体労働の少なさ」2.39、「社会的イメージの良さ」2.45、「労働時間の短さ」2.49、「休暇のとりやすさ」2.55となっている。

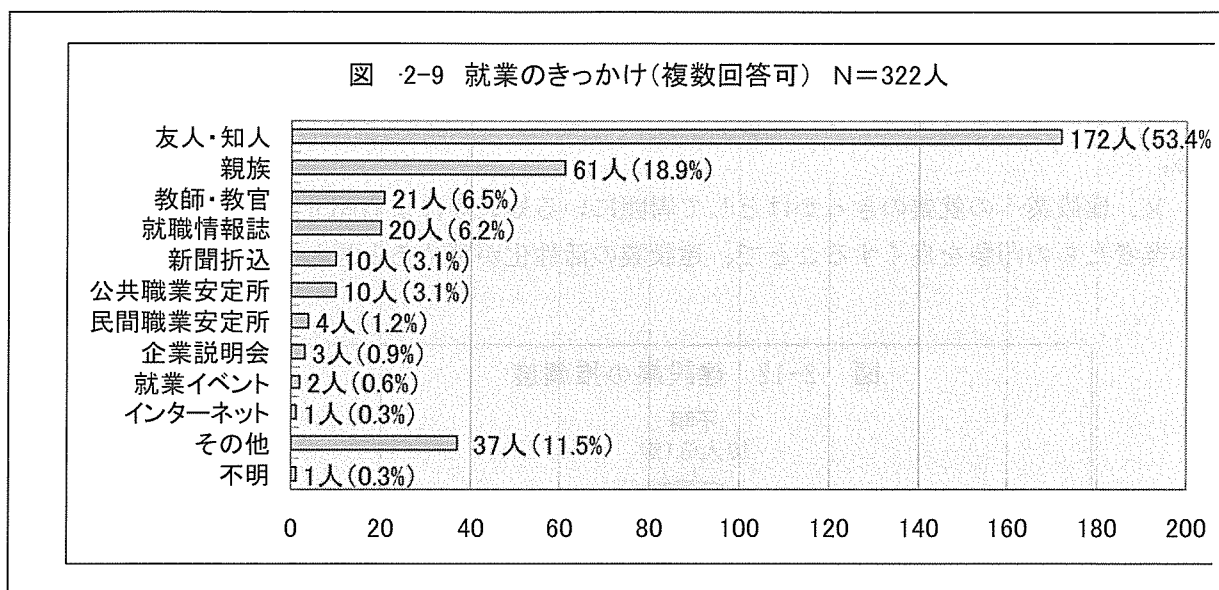
これにより作業者は職場の人間関係等の職場環境、収入の安定性等の金銭面での労働条件、又仕事のやりがいを重要と思っていることがわかる。

これに対して、週2日休日確保や休暇のとりやすさ等の労働条件についてあまり重要と考えておらず、又、多少労働が厳しかったり長かったりすることについても、あまり問題ないと考えているようである。



2) 現在の職業に就く時のきっかけ

現在の職業に就く時のきっかけとしては、友人・知人が最も多く 172 人（全体の 53.4%）、次に親族 61 人（18.9%）、教師・教官 21 人（6.5%）と、大多数がその作業者の周りの人からの紹介が多いことがわかる。

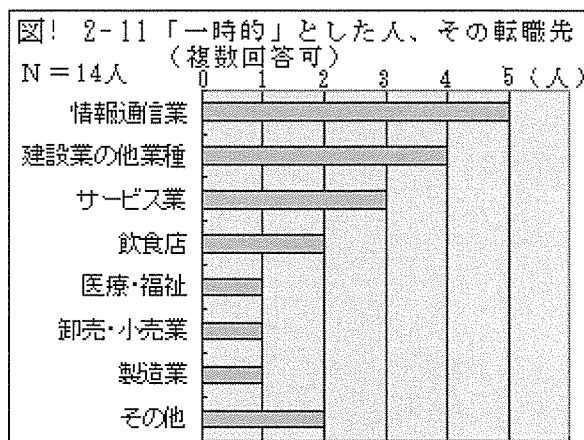
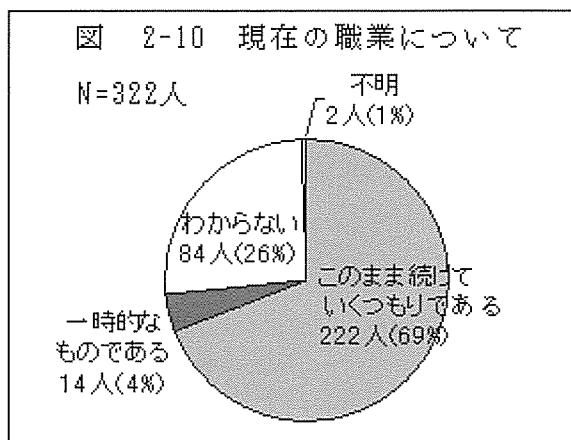


3) 現在の職業について続けていくか

現在の職業について、「このまま続けていくつもり」と答えた作業者は 222 人（69%）に対して、「一時的なもの」とした人は 14 人（4%）であった。（図 2-10）

しかし「わからない」とした人が 84 人（26%）おり、建設業の離職率が 15%くらいであるということを見ると、より良い条件があったらそちらに移るという傾向があるようである。

又、「一時的」とした人で、転職先としては「情報通信業」、「建設業の他業種」等が多くなっていたが、サンプル数が 14 人と少なすぎ信用性は低い。（図 2-11）



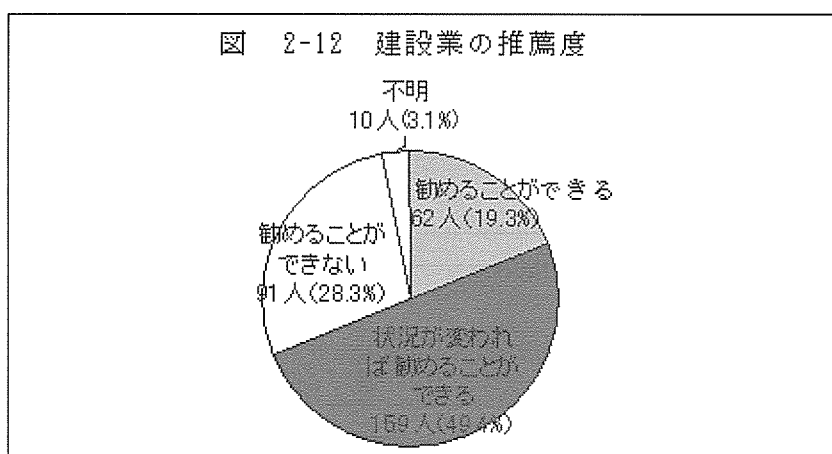
#### 4) 建設業への就業の推薦度

「建設業への就業を、ご子息や知人の方に勧めますか」という質問をしたところ、「勧めることができる」とした人は62人と19.3%にすぎず、「勧めることができない」とした人が91人と28.3%になった。(図2-11)

これに対して「現在の状況では勧めることができないが、状況が変われば勧めることができる」とした人は159人と約半分を占めている。

これにより、建設業が全くの絶望的な状況にあるというわけではなく、現在作業者の人が不満に感じている労働条件等の改善しだいで、魅力ある職業にできるということが予想される。

又、建設業への就業のきっかけとして周囲にいる知人等による紹介が多いため、こうした作業者たちの印象を良くすることで、建設業の活性化が望めると思われる。



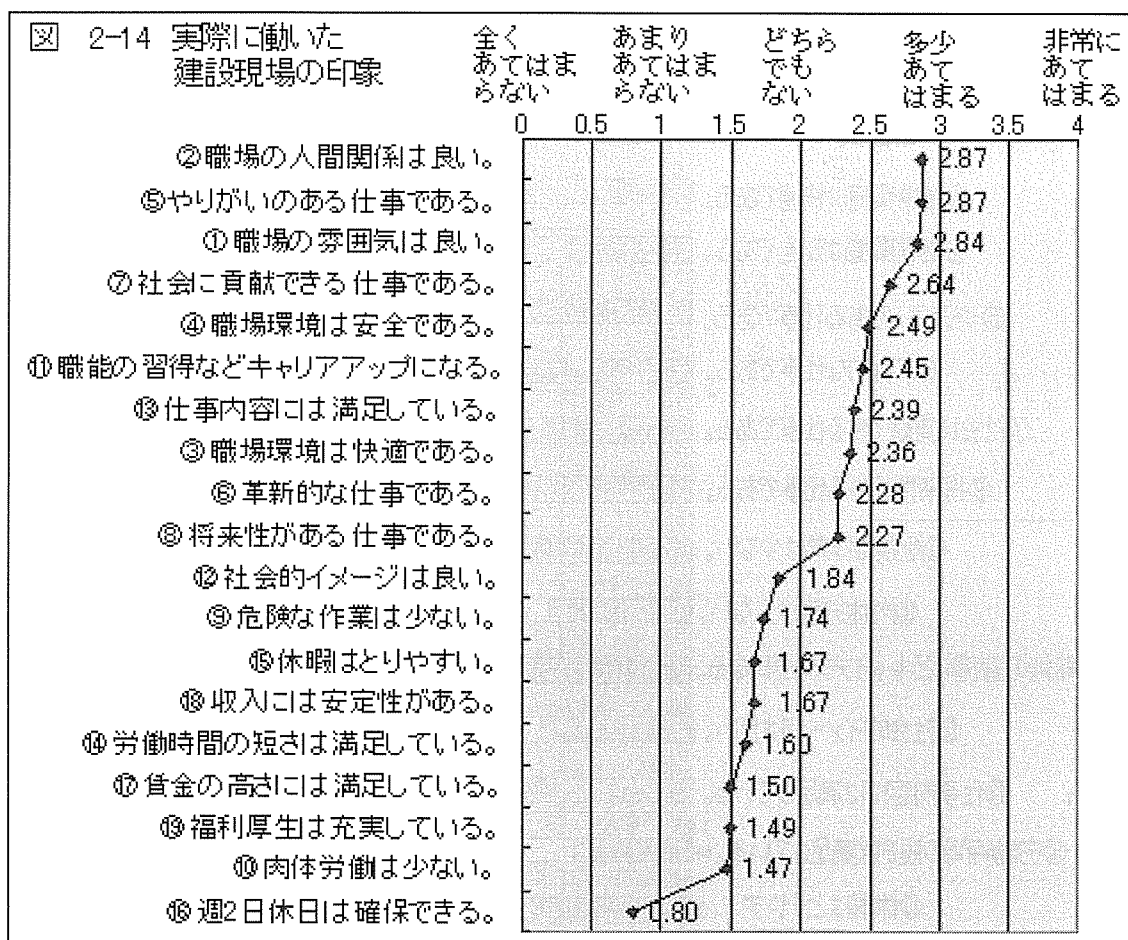
### 2.2.3 労働環境

#### 1) 実際に働いた建設現場の印象

実際に働いた建設現場の印象について質問したところ、図 2-13 のような度数分布になった。



このとき、「わからない」、「不明」を除き、「非常にあてはまる」=4、「多少あてはまる」=3、「どちらでもない」=2、「あまりあてはまらない」=1、「全くあてはまらない」=0、とスコアを付けその平均点を算出し、上から平均点の大きい順に並べ替えると図 2-14 のようになる。



このとき建設現場の印象として良いものは、「職場の人間関係が良い」と「やりがいのある仕事」が最もスコアが高く 2.87、続いて「職場の雰囲気は良い」2.84、「社会に貢献できる仕事である」2.64 となっている。

よって作業員は仕事にやりがいを感じ、又、人間関係等の職場環境は良好であると感じていることがわかる。

印象の悪いものとしては、「週2日休日は確保できる」が最も悪く 0.80、続いて「肉体労働は少ない」1.47、「福利厚生は充実している」1.49、「賃金の高さには満足している」1.50、「労働時間の短さには満足している」1.60 となっている。

よって、作業員は労働条件の面で全般的に悪い状況にあると感じており、特に週2日休日の確保において、状況は深刻と考えていることがわかる。

これにより現在の建設業において、労働条件において苦しい状況にあり、作業員は仕事のやりがい等の思いだけで仕事を続けているという傾向が見える。こうした状況の放置は、建設業の今後を考える上で致命的なものとなりかねず、早急な改善が求められる。

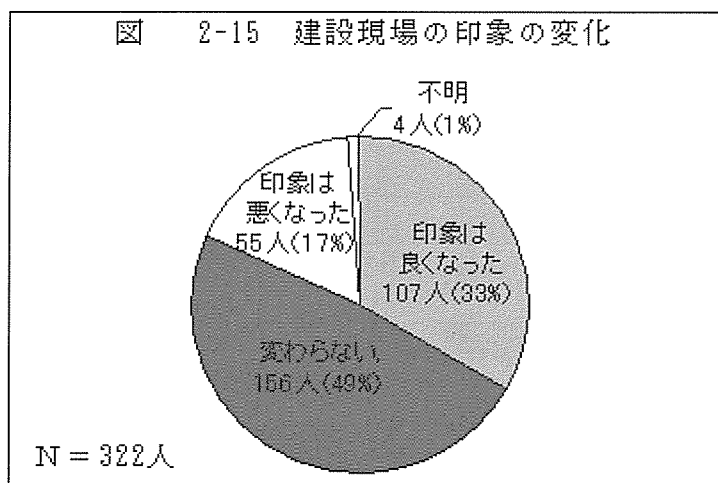
## 2) 実際働いた建設現場の印象と働く前の印象との変化

「実際に働いた建設現場の印象は、働く前と比べてどのように感じますか」という質問をしたところ、結果は図 2-15 のようになった。

これによると「印象は良くなった」が 107 人と 33% となっており、逆に「印象は悪くなった」という人は 55 人 (17%) となった。

よって、建設現場の印象は実際に働くと良くなったという人が比較的多くなる結果となった。

しかし、「変わらない」とした人も 156 人と半数近くを占めており、決して楽観視できる結果ではないと思われる。



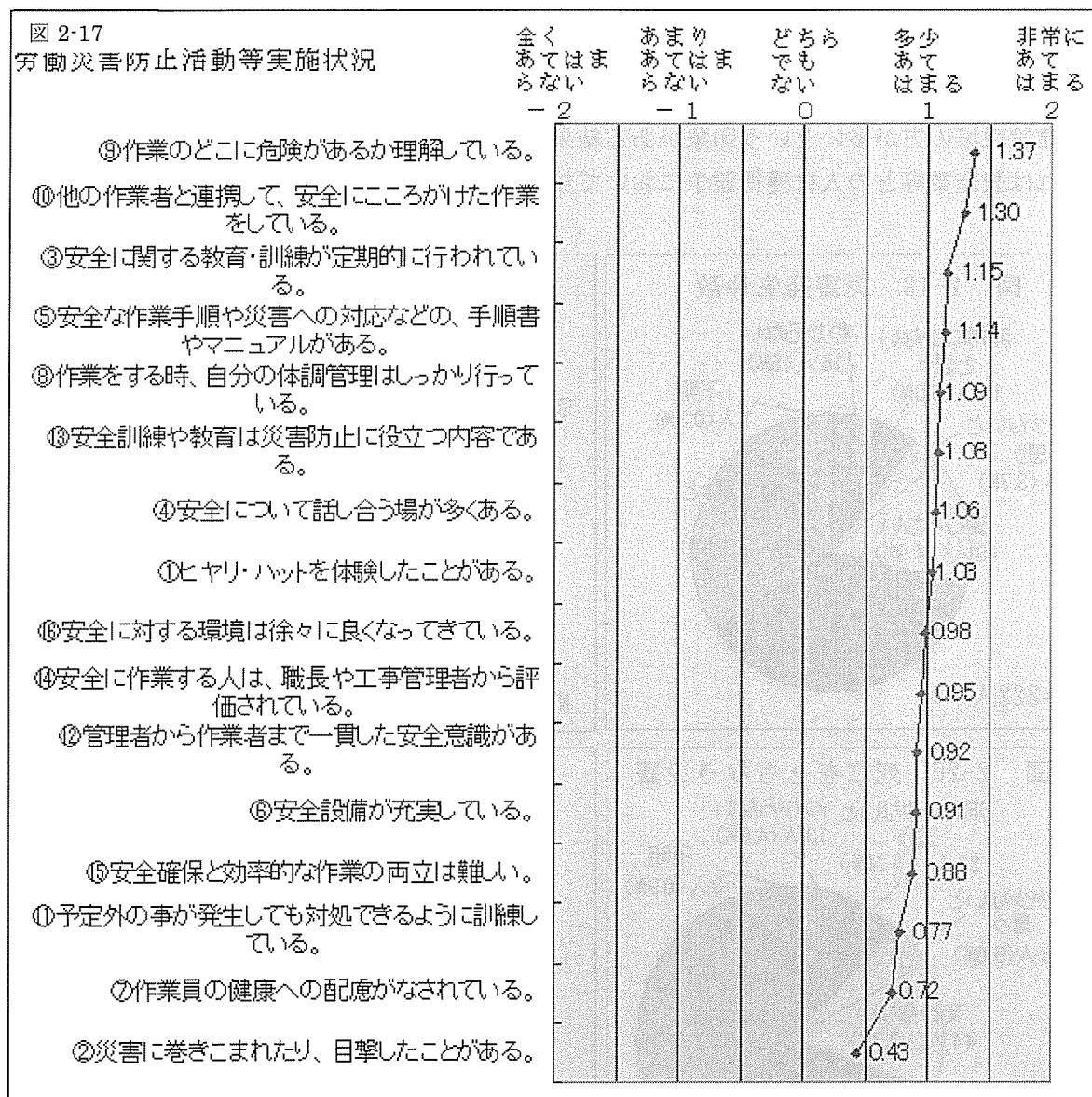
## 2.2.4 労働災害防止活動

### 1) 労働災害防止活動等

労働災害防止活動等についての質問をしたところ、その度数分布は図 2-16 のようになった。



このとき、「わからない」と「不明」を除き、「非常にあてはまる」=2、「多少あてはまる」=1、「どちらでもない」=0、「あまりあてはまらない」=-1、「全くあてはまらない」=-2、とスコアを付けその平均点を算出し、上から平均点の大きい順に並べ替えると図 2-17 のようになる。



このとき、「作業のどこに危険があるか理解している」が最もスコアが高く 1.37、続いて「他の作業者と連携して、安全にこころがけた作業をしている」1.30、「安全に関する教育・訓練が定期的に行われている」1.15、「安全な作業手順や災害への対応などの、手順書やマニュアルがある」1.14 となっている。

このように、全般的に労働災害防止活動のスコアは高く、作業員の労働災害防止活動に対するモラルは比較的高いものと思われる。

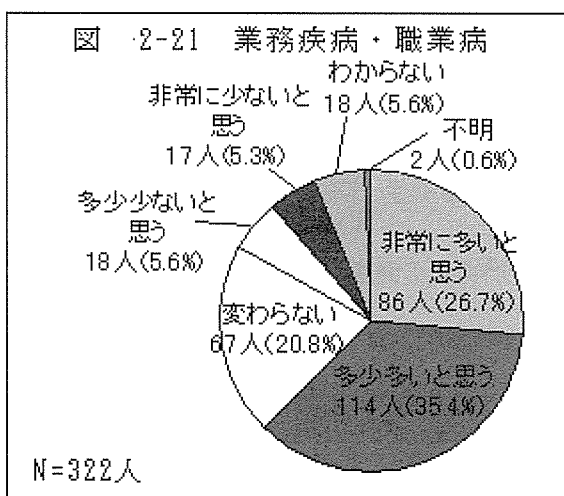
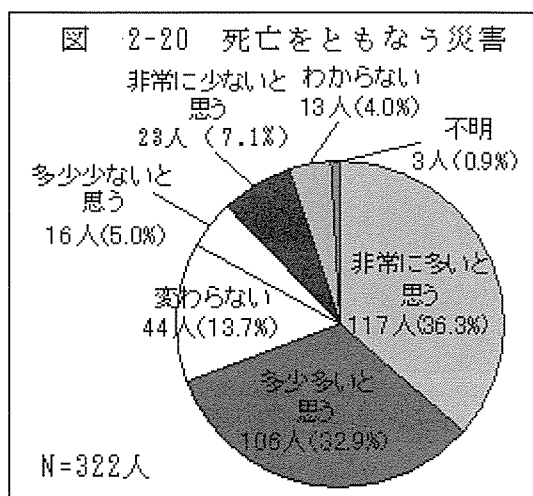
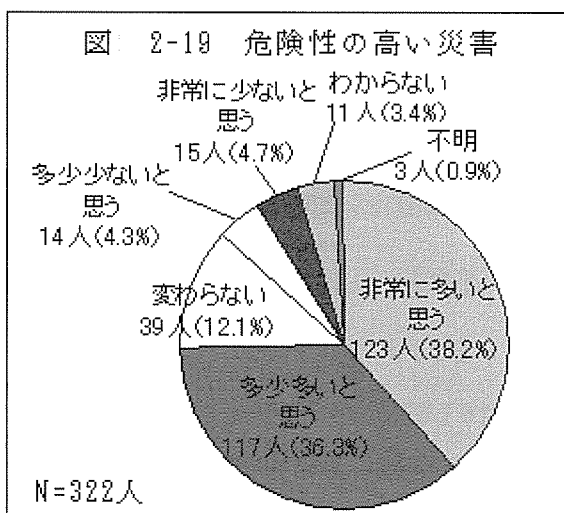
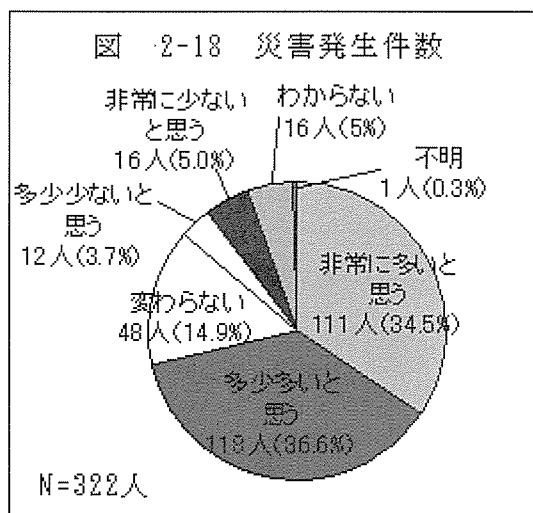
これに対して「災害に巻き込まれたり、目撃したことがある」に関してはスコアが最も低く 0.43 となっており、実際に災害を体験したことがある作業員が減りつつあるということがわかる。

又、「作業員の健康への配慮がなされている」0.72 や「予想外の事が発生しても対処できるよう訓練している」0.77等の項目で、比較的スコアは低くなった。

## 2) 他のものづくりの現場と比べたときの労働災害等

「他のものづくりの現場と比べたときの、建設現場の印象」について質問したところその結果は図 2-18～図 2-21 のようになった。結果として、災害発生件数、危険性の高い災害、死亡をともなう災害、業務疾病・職業病、全ての項目において、他のものづくりの現場と比べて建設現場の方が多という印象がある結果になった。

これは製造業等との人材獲得競争において放置できない問題といえるだろう。

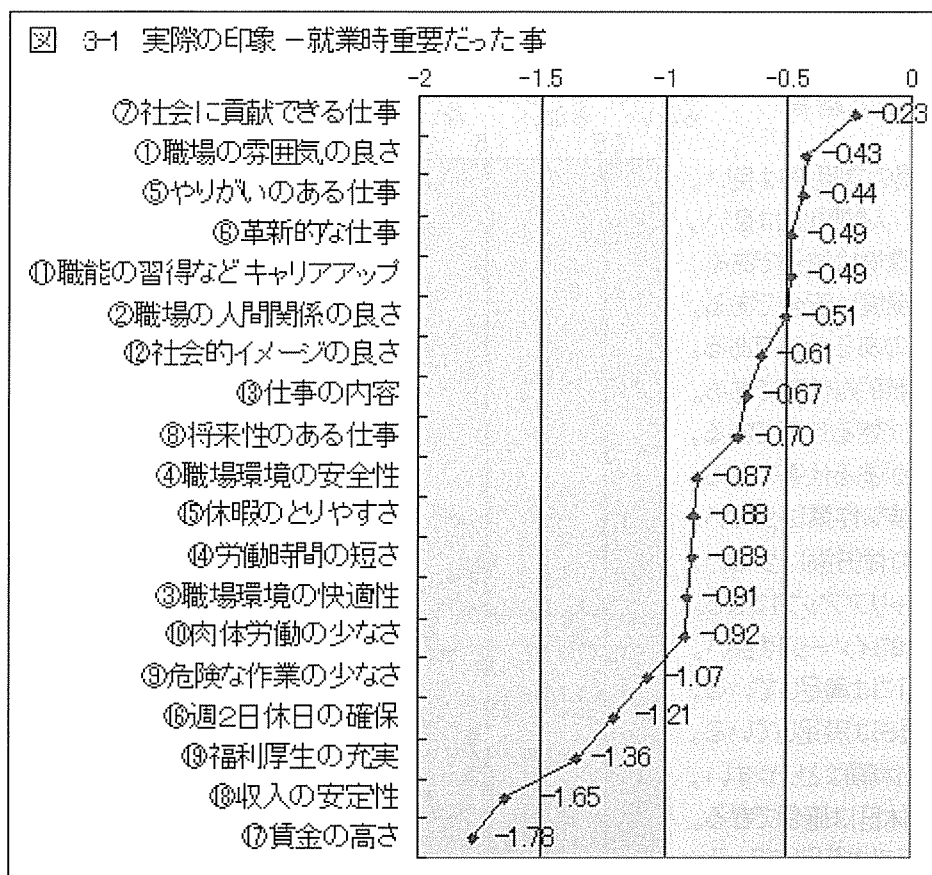




## 2.3 アンケート結果の分析

### 2.3.1 「就業時重要であった事」と「実際に働いた印象」の比較

就業時に重要と考える条件と現実とに大きな差が生じたとき、それが離職の一因ともなりうる。よって、2.2.2-1)における「就業時重要であった事」と、2.2.3-1)における「実際に働いた印象」を比較し、そこにあるギャップを見ていく。ここでは「実際に働いた印象」のスコアから「就業時重要であった事」のスコアの差をとり、これを小さい順に並べると図 3-1 のようになる。



このときギャップの大きいものとして、「賃金の高さ」-1.78、「収入の安定性」-1.65、「福利厚生 of 充実」-1.36、「週2日休日の確保」-1.21、といったものが挙げられ、金銭面及び週2日休日確保におけるギャップが目立つ。

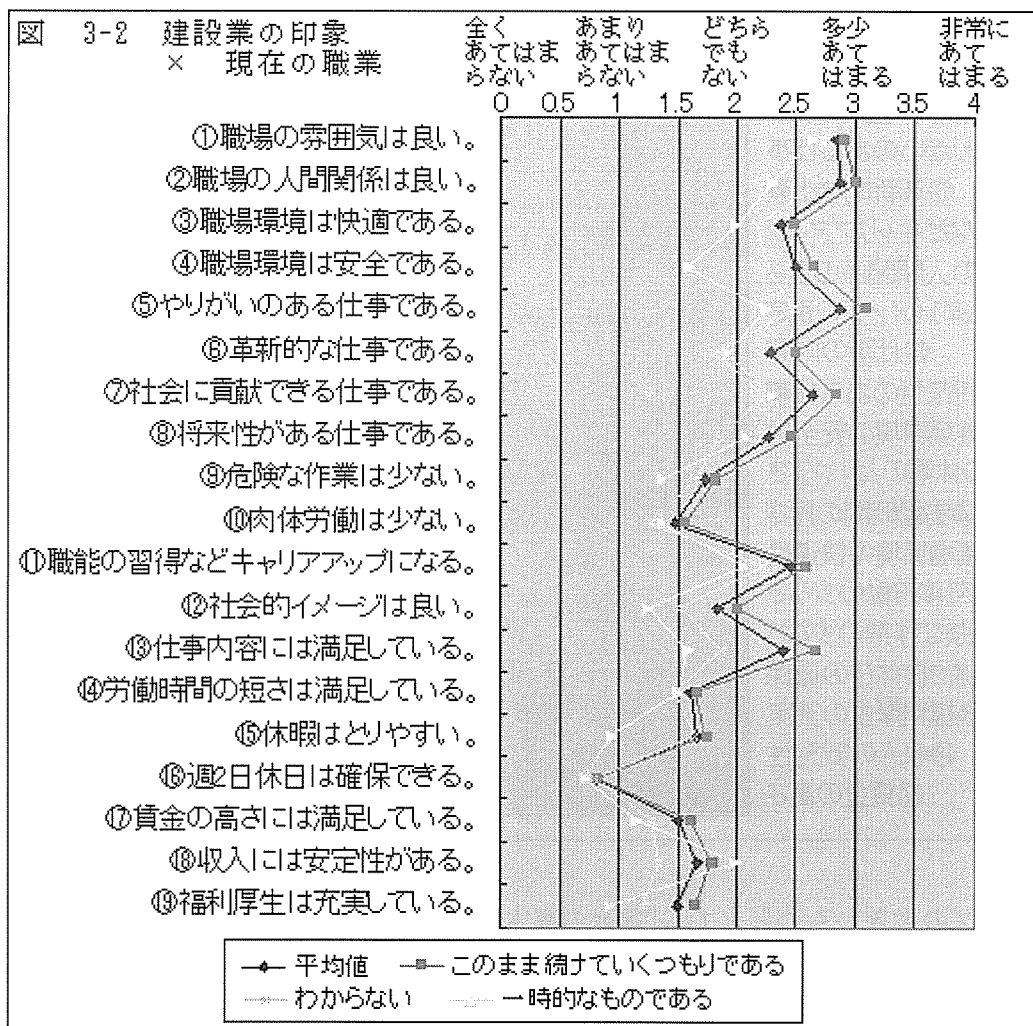
よって、改善すべき労働条件の中で、特にこうした項目におけるギャップの改善が急務とされる。

### 2.3.2 離職の引き金となる要因についての分析

建設業における離職原因を明確にするためには、今後建設業を続けていく意思の無い人がいかに考えているか知る必要がある。ここでは 2.2.2-3)において示した「現在の職業について」という質問に対する回答ごとの分析を行う。

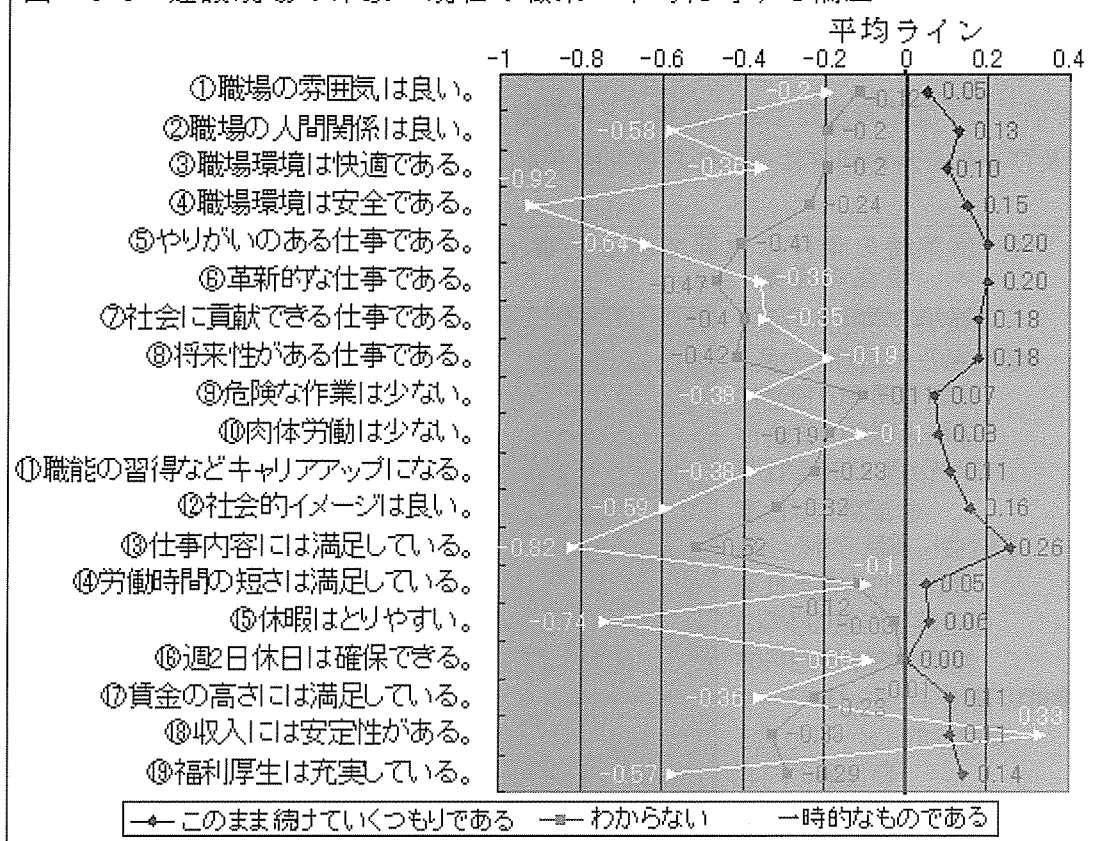
#### 1) 実際に働いた建設現場の印象

実際に働いた建設業の印象について、全体の平均値及びそれぞれの回答における平均値を求めると図 3-2 のとおりとなる。



このとき、それぞれの回答での平均値から全体の平均値の差をとり、全体平均にたいする偏差を求めると図 3-3 のとおりになる。

図 3-3 建設現場の印象 × 現在の職業 平均に対する偏差



この平均に対する偏差を見ていくと、「このまま続けていくつもりである」とした人の印象は、全ての項目において平均値を上回っている。

これに対して、まだ続けるか辞めるか決めかねているグループである「わからない」とした人の印象では、「仕事内容には満足している」、「革新的な仕事である」、「将来性がある仕事である」、「やりがいのある仕事である」、「社会に貢献できる仕事である」といった項目において悪いスコアに偏っている。

又、「一時的なものである」と転職の意思があるグループにおいては、「職場環境は安全である」、「仕事の内容には満足している」、「休暇はとりやすい」、「やりがいのある仕事である」、「社会的イメージは良い」という項目において悪いスコアに偏っている。

これにより、厳しい労働環境の中で、仕事の内容に不満足、仕事のやりがいの喪失等により仕事への意気込みが失われた時、又作業の安全性が失われることで労働条件との釣り合いが取れなくなった時に離職につながる事が予想される。

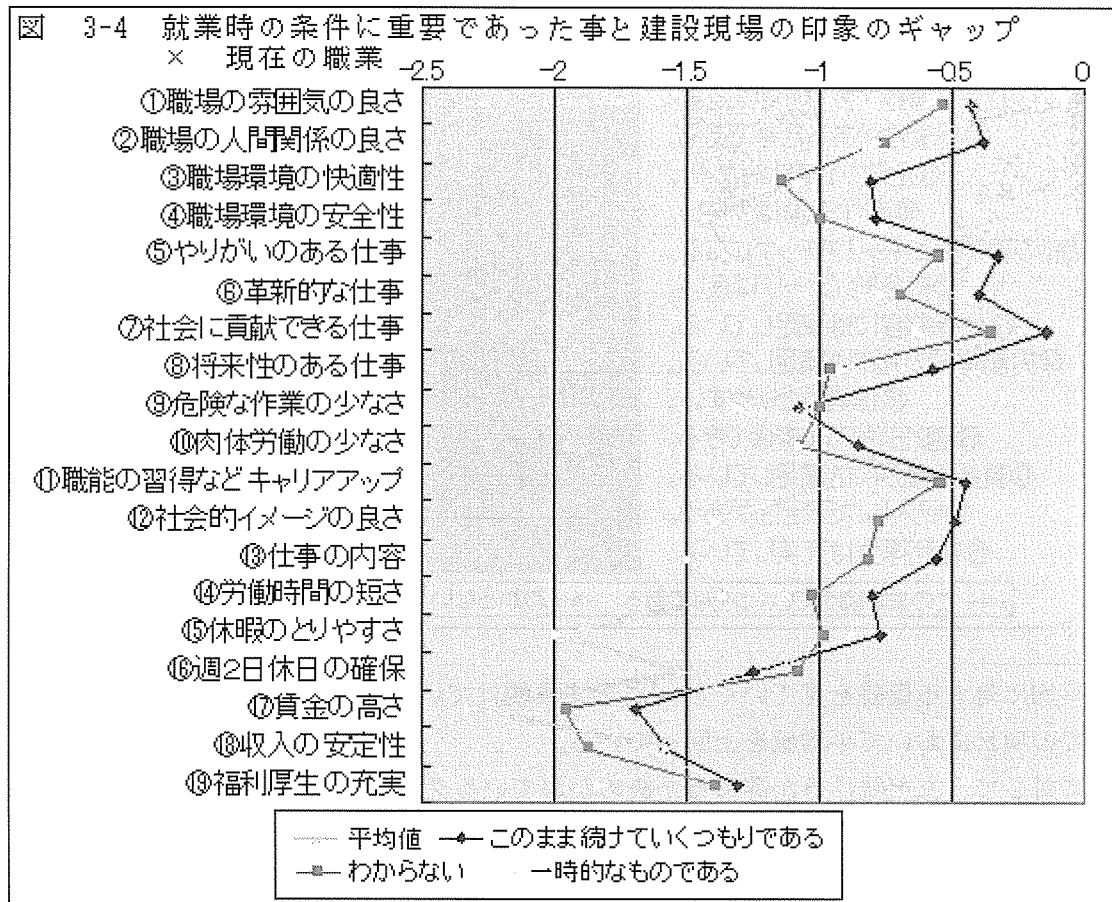
又、危険作業や肉体労働、労働時間等の項目においてはあまり変化が無く、これが直接的な離職の原因になることは少なそうである。週2日休日確保においても変化は無いが、これはもとの平均値が低すぎることに起因すると思われる。

又、作業の安全性は離職に関係あり、危険作業の多さは関係ないということに矛盾を感じられるかもしれないが、この2つは根本的には違う問題である。すなわち、作業の安全性とは「作業を安全に行えること」であり、それが危険な作業であっても方法等をしっかりとすれば安全に作業を行えることは可能である。これにより、危険作業があっても、それを安

全に行えるような設備もしくは施工法を整えることが重要である。

2) 「就業時重要であった事」と「実際に働いた印象」のギャップ

2.3.1 で示した「就業時重要であった事」と「実際に働いた印象」のギャップについて全体の平均値及びそれぞれの回答についてみると図 3-4 になる。



このとき全体の平均値に対する偏差を、先ほどと同様に求めると図 3-5 のようになる。